

報告

子どもの自尊感情

「子ども用5領域自尊心尺度」邦訳版の検討

林 みどり

概要

Pope, A. W. らの「子ども用5領域自尊心尺度」邦訳版を使用して子どもの自尊感情を測定し、探索的因子分析にて検討した。某県内の一小学校5年生と一中学校2年生、同県内一病院の小児科を外来受診あるいは入院している子ども達 (n=145, 6~15歳) を対象とした。「子ども用5領域自尊心尺度」60項目のうち社会的望ましさを測定する虚構尺度は除き、残る50項目について因子分析をした。その結果、3因子16項目を抽出、因子名は「容姿」、「理想の自分」、「友達」とした。各因子の内的一貫性は $=0.73\sim 0.82$ であり、3因子を下位尺度として属性により比較したところ、年齢、性別のいずれにおいても、平均得点に有意な差はなかった。

キーワード； 自尊感情, 子ども, 自尊感情尺度

1. はじめに

自尊感情(あるいは自尊心: Self-Esteem; 以下, SE)とは、自分自身をどのように感じているのか、今の自分の能力や価値に関する自己評価的な感情や感覚のことである。本邦では1970年代より、英語版を邦訳した尺度でSEを測定した研究がされている¹⁾。信頼性、妥当性が検討されている邦訳版の尺度には10項目単因子からなるRosenberg, M.のSE尺度があり、成人向きとして評価され使用されている²⁾。子ども用としてはCoopersmith, S.のthe Self Esteem Inventoryがある。この自尊感情測定尺度日本版を小学生を対象に検討したTahara, H.らは、妥当性について検討の余地があるとしている³⁾。その他の子ども用SE尺度としてPope, A. W.らのFive-Scale Test of Self-Esteem for Children (子ども用5領域自尊心尺度)が紹介されており、標準テストとして用いるためには検討不足であるとしながらも、臨床的査定に役立つ可能性が述べられている⁴⁾⁵⁾。子ども用5領域自尊心尺度は各領域を相対的に比較することにより、個々の子どもの特徴を記述的にとらえる上で有用とされている。本邦では、IDDM患者と高校生のSEを測定し領域毎に比較した研究がある⁶⁾。しかし、邦訳版自体の適応について検討した研究は見あたらない。今回、Popeらの「子ども用5領域自尊心尺度」邦訳版⁵⁾を使用してSEを調査し、検討を行ったので報告する。

2. 方法

2.1 対象

某県内一小学校5年生44名と一中学校2年生34名、同県内一病院の小児科を外来受診している57名と入院している10名の合計145名(6~15歳)を対象とした。健康児と病児のSE得点を比較したところ、得点に有意差はなかったため⁷⁾、因子分析では全員を対象とした。

2.2 調査方法

病院での調査は、1998(平成10)年7~8月に実施した。自己記載を原則に、必要に応じて調査者が読み上げ対象者に回答してもらった。学校での調査は、同年9月学校で調査者が説明して集団調査を実施した。

2.3 測定用紙

SEの測定は、Popeらの「子ども用5領域自尊心尺度(以下, SE尺度)」邦訳版⁵⁾を使用した。このSE尺度では下位尺度は6つとされており、全般(自己についての全体にわたる評価)、学業(学力や成績の査定ではなく、児童・生徒としての評価)、身体(自分の体の見栄えや動きへの満足)、家族(家族の一員としての自分)、社会(交友関係での満足感)、虚構(社会的に望ましいとされるような回答をしていないか)を設定している。各尺度10項目から構成され、計60の質問項目からなる。質問に対し「いつ

もそう思う=2点,「時にはそう思う=1点,「ほとんどそう思わない=0点」の3段階で回答を求めた。得点は各尺度0~20点であるが,虚構尺度はSE得点としては含まれない。虚構尺度10項目のうち得点が2点となる回答が4つ以上ある場合,社会的に望ましいとされる態度で回答していると判断される。

2.4 分析方法

(1) 因子分析

SE尺度の60項目より社会的望ましさを測定する虚構尺度10項目を除き,SE得点として算定される50項目について因子分析を行った。因子の抽出には最尤法を用いた。因子数は,固有値1以上の基準を設けた。プロマックス回転を行った。3つ以上の項目が関連している因子を下位尺度として扱った。

(2) 下位尺度の回答値の比較

下位尺度を構成する項目の回答値について,属性による違いを調べた。下位尺度毎に該当す

る項目の回答値を単純合計し,項目数で除した値をSE得点とした。対象を属性によって2群に分け,2群間の差の検定(等分散性を検定した上でt検定あるいはWelchの検定)でSE得点を比較した。有意水準はp値5%で判断した。

2.5 倫理的配慮

病院での調査は,看護部に研究の主旨を説明し了承を得てから,対象者本人と付き添いの保護者に調査目的を文書及び口頭で説明し同意を得た。学校での調査は,学校長に研究の主旨を説明し了承を得てから,対象者本人に調査目的を文書及び口頭で説明し同意を得た。保護者には調査の説明文書を子どもを通して配布し,保護者の署名が記入された返書が得られた場合に保護者の同意が得られたと判断した。本人及び保護者へ説明した内容は,参加は任意であること,匿名性を保持すること,参加有無による不利益は生じないこと等であった。

表1 SE尺度の因子分析(最尤法:Promax回転)および各因子内の内的一貫性(Cronbach's)

項目	因子負荷			
	第1因子	第2因子	第3因子	
【容姿】				
21 私は,自分の顔立ちは良いと思います	.909	-.148	-.117	.82
9 私は,自分の顔立ちが気に入っています	.841	-.138	-.014	
33 私の笑顔はすてきだと思います	.644	.030	.183	
31 私は,いい人間だと思います	.545	.094	.074	
57 私はよい体つきをしていると思います	.530	.062	.014	
【理想の自分】				
13 私は今の自分とはもっと違っていたらいいのに,と思います	.192	.698	-.095	.77
35 私はもっと友だちをつくるのが上手だったら,と思います	-.114	.657	-.062	
50 私は自分がもっと優秀な生徒だったらいいのに,と思います	-.133	.631	.062	
51 私はもっと他の人の様にかっこよかったらいいのに,と思います	.122	.596	-.123	
52 私がもっと今の自分と違っていたら,私の両親も幸せだろうと思います	-.086	.526	.016	
37 私は,今の自分に じゅうぶんに まんぞくしています	.201	.456	.277	
15 私は他の同じ年の友達と同じくらい身長があつたらいいのに,と思います	-.086	.445	-.044	
【友達】				
23 私は友だちという時,とても楽しい気持ちになります	-.114	-.048	.938	.73
32 私は,学校にいる時はとても楽しいです	.118	.016	.594	
11 私は,ほかの友達と一緒にいると,気持ちよくなります	-.007	-.062	.581	
17 私の友だちは,私の考えをよく聞き入れてくれます	.105	-.055	.427	
因子寄与	3.81	1.93	1.28	
因子寄与率(%)	23.82	12.03	7.99	
因子間相関	第1	第2	第3	
第1	1.00	.38	.44	
第2		1.00	.14	
第3			1.00	

3. 結果

3.1 対象者の概要

全対象者の平均年齢 11.2(SD=2.2)歳, 中央値 11.0 歳, 最頻値 13 歳であり, 右寄りの分布であった。小学生 84 名(男 39 名, 女 45 名), 中学生 61 名(男 35 名, 女 26 名)であった。性別は男 74 名, 女 71 名であった。

3.2 SE 尺度の因子分析

全対象者において SE 尺度 50 項目の因子分析を行った。因子負荷量 0.35 に満たない項目と, 複数の因子に渡る因子負荷 0.35 以上の項目が出現しなくなるまで, 項目を削除しながら因子分析を繰り返したところ, 30 項目 8 因子が抽出された。これより項目数が 2 つ以下の 3 因子を削除した 24 項目で再度因子分析を実施, 同様の手順で項目と因子を削除し, 1 つの因子に因子負荷 0.35 以上の項目が 3 つ以上になるまで因子分析を繰り返した。

16 項目を因子分析した時点で, 全ての因子において因子負荷 0.35 以上の項目が 3 つ以上となったため, 因子数 3 と判断した。その因子負荷を表 1 に示した。なお, 項目に付記された数

字は, SE 尺度の質問番号である。

第 1 因子は SE 尺度の「全般(31)」と「身体(9, 21, 33, 57)」の 4 項目であった。「自分の顔立ちは良い」「自分の顔立ちが気に入っている」等で負荷量が高く, 【容姿】に関する因子とした。第 2 因子は「全般(13, 37)」, 「学業(50)」, 「身体(15, 51)」, 「家族(52)」, 「社会(35)」の 7 項目であった。「今の自分とはもっと違っていたら」「友達を作るのがもっと上手だったら」等で負荷量が高く, 【理想の自分】に関する因子とした。第 3 因子は「学業(32)」, 「社会(11, 17, 23)」の 4 項目であった。「友達といると楽しい」「学校にいる時は楽しい」等で負荷量が高く, 【友達】に関する因子とした。第 1 因子【容姿】の寄与率は 23.82%であった。

3.3 各因子の SE 得点の比較

3 因子それぞれの内の一貫性は $\alpha = 0.73 \sim 0.82$ の値を示し, 十分な値が得られたため, 3 つの下位尺度とした。SE 得点を属性によって平均値を算出し比較した結果は表 2 に示した。年齢, 性別のいずれにおいても, SE 得点に有意な差は見られなかった。

表 2 全対象者の属性における SE 得点の平均値

対象 (対象者数)	全対象者 (n=145)	年齢		性別			
		~ 11 歳 (n=83)	12 歳~ (n=62)	男 (n=74)	女 (n=71)		
第 1 因子【容姿】	.61 ± .48	.61 ± .46	.60 ± .50	ns	.62 ± .50	.59 ± .45	ns
第 2 因子【理想の自分】	1.20 ± .47	1.22 ± .48	1.17 ± .46	ns	1.22 ± .44	1.17 ± .50	ns
第 3 因子【友達】	1.51 ± .44	1.45 ± .45	1.57 ± .43	ns	1.47 ± .46	1.54 ± .42	ns

ns: not significant (t 検定)

4. 考察

4.1 因子分析

因子分析で得られた 16 項目 3 因子は, 原版 SE 尺度では 5 因子とされる 50 項目とは異なった構造を示した。抽出した 3 因子のうち, 虚構尺度をのぞく 5 因子「全般」「学業」「身体」「家族」「社会」とほぼ対応したのは, 第 1 因子【容姿】と「身体」, 第 3 因子【友達】と「社会」であった。

邦訳版作成の過程においては文化的背景を考慮する必要がある。アメリカは独立性を基盤とした自己像であり, 東洋は相互依存性を基盤とした自己像とされている⁸⁾。日本の場合, 社会を構成する人々のグループにしっかりととけ込

めた感じを持ち自分の居場所が見つかることで, 自分を肯定的にとらえることができると考えられる。このことは第 3 因子【友達】との関連をうかがわせる。逆に友達と異なる自分の特徴を受け容れられない場合は, 第 2 因子【理想の自分】として現在の自分への評価につながると考えられる。

子どもの SE を得点化し, どの領域で低下しているのか検索するには, 5 因子による SE 尺度は限界があると考えられる。尺度では全般的な SE を測定し, SE を低めている要因を把握する方法とは別個にするとよいと考えられる。

4.2 属性によるSE得点の比較

自己概念の情緒的側面をしめすものがSEとされている。自己概念には性差が存在すると報告があり、女子においては他者を意識した側面が大きいとされている²⁾。測定用具としては、男女差を感知する尺度がよいと考えられる。

4.3 研究の限界と課題

子どもの心理状態をアセスメントしSEの向上を図るため介入の手がかりとしてであれば、PopeらのSE尺度邦訳版は使用できると考えられる⁹⁾。しかし、測定用具としては検討の余地がある。

SE得点を属性により比較したが、子どもの心理特性を十分に反映しているとは言えない。年齢や性別によるSEの違いが指摘されているが⁴⁾、本調査では明らかにはならなかった。対象が一地区の集団であり、対象数が多くなかったためと考えられる。本研究での結果を参照し、子どもの心理をアセスメントする方法の検討を今後の課題としたい。

謝辞

本調査にご協力くださった小・中学生、保護者、施設関係者の皆さまに感謝いたします。

参考文献(引用文献)

- 1) 遠藤辰雄, 安藤延男, 冷川昭子ほか: Self-Esteemの研究. 九州大学教育学部門紀要, 18, 53-65, 1974
- 2) 山本真理子, 松井豊, 山成由紀子: 認知された自己の諸側面の構造. 教育心理学研究, 30, 64-68, 1982

3) Tahara, H., Okita, M., Tsurusaki, T. *et al.* Validity and reliability of the Japanese version of the self esteem inventory. *Journal of Physical Therapy Science*, 9, 87-92, 1997

4) 遠藤辰雄, 井上祥治, 蘭千壽: セルフ・エスティームの心理学 自己価値の探求(初版). ナカニシヤ, 16-17, 20, 23-25, 168-177, 196-199, 271-272, 1992

5) Pope, A. W., McHale, S. M., Craighead, W. E.: *Self-Esteem Enhancement with Children and Adolescents*. Pergamon Press, 1988 (高山巖, 佐藤正二, 佐藤容子ほか: 自尊心の発達と認知行動療法 子どもの自信・自立・自主性をたかめる, 岩崎学術出版社, 1-8, 47, 207-212, 1992)

6) 平野久美子, 新平鎮博, 西牧真里ほか: 思春期型糖尿病患者のセルフエスティーム. 大阪市立大学生生活科学部紀要, 47, 83-86, 1999

7) 林みどり: 小児の自尊感情 慢性疾患患児と健康児の比較.(印刷中)

8) Markus, H. R., Kitayama, S.: Culture and the self: implications for cognition, emotion, and motivation. *Psychological Review*, 98, 224-253, 1991

9) 荒井良直: サイコエデュケーションの現場から セルフ・エスティーム. こころの臨床ア・ラ・カルト, 20(2) 295-299, 2001

注記

なお本研究は、1998年度富山医科薬科大学医学部看護学科卒業論文を加筆・修正したものである。

(受付: 2003年11月19日, 受理: 2004年1月10日)

Self-Esteem in Children : A Factor Analysis of the Japanese Version of the Self-Esteem Scale

Midori HAYASI

Abstract

This study examined a factor structure of the Japanese version of the Five-Scale Test of Self-Esteem for children. The scale was administered to 145 children (6~15 years old) who were fifth graders in a primary school , second-year students in a junior high school, and children in- and out-patients of a pediatric department in a prefectural hospital. The exploratory factor analysis (maximal likelihood method, promax rotation) resulted in three factors. These were named "appearance", "ideal himself/herself", and "friends". Cronbach's coefficients of three factors were 0.73, 0.77, and 0.82. There were no significant age, or gender differences on subscale scores.

Key words self-esteem, children, Self-Esteem Scale